



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドの受容： 情報収集の実態と研究の特質

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 遠座,知恵 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/127855

入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドの受容

—— 情報収集の実態と研究の特質 ——

遠 座 知 恵*

教育学分野

(2011年9月28日受理)

はじめに

本稿の目的は、東京帝国大学（以下、東京帝大）助教授入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドの受容の実態と特質を明らかにすることにある。プロジェクト・メソッドといえば、まずキルパトリック（William H. Kilpatrick）の理論が想起されるが、近年の研究では、彼の論文「プロジェクト・メソッド（The Project Method）」発表以前から、プロジェクトを導入した多様な実践が行われていたことが指摘されている⁽¹⁾。筆者はそうした状況の中で成立したアメリカのさまざまな教育情報の存在に着目し、大正新教育期のわが国で、実際には何が収集・選択、活用されていたのかを検討してきた。

当時プロジェクト・メソッドを先駆的に日本に紹介した研究者には、東京女子高等師範学校（以下、東京女高師）教授兼附属小学校主事を務めた藤井利誉や北沢種一、奈良女子高等師範学校（以下、奈良女高師）教授の松濤泰巖などがいた。両校の附属小学校や附属幼稚園では、彼らのもたらした情報を活用したプロジェクト・メソッドの導入に関する実践的研究が行われていた⁽²⁾。入沢も彼らと同様、プロジェクト・メソッドに関する当時の代表的研究者であったが、彼の研究の実態や特質に関しては未だ本格的に検討されていない⁽³⁾。入沢の研究は、東京帝大の共同研究として始まり、本来実践への導入を企図したものではなかったが、彼と親交をもつ山崎博がその実践的研究に取り組むこととなった。1921（大正10）年に神奈川県女子師範学校附属小学校に赴任した山崎は、入沢の指導のもとにプロジェクト・メソッドを、「修身、地

理、歴史、体操、理科」の実践に導入したという⁽⁴⁾。両者の師弟関係はその後も継続し、田島尋常高等小学校（以下、田島小学校）に赴任すると、入沢が新たに研究に着手した文化教育学に依拠して体験教育を唱導していくことになった⁽⁵⁾。

プロジェクト・メソッドの受容に関する従来の研究は、わが国の教育実践への導入に着目してきたが⁽⁶⁾、入沢も含め教育学者による研究の実態をほとんどとりあげてこなかった。しかし、受容史の視点からみた場合、実践者によるプロジェクト・メソッドの研究や理解は、国内の教育学者の研究や彼らもたらした情報に依拠していたことが予測される。筆者は、プロジェクト・メソッドが実践に導入されるまでの、教育情報の一連の受容プロセスに、彼らの研究を位置づけ、その実態と特質を解明する必要があると考えている。こうした課題の遂行は、実践への関心をもつ教育学研究がどのような意義や問題点を内在していたのかを解明することに資するといえよう。

そこで本稿では、以下の方法で、入沢によるプロジェクト・メソッド受容の実態と特質を明らかにしたい。まず、プロジェクト・メソッドに関する入沢の論考の分析から、彼が収集した情報を可能な限り特定し、研究の範囲や対象を明らかにする。さらに、入沢の研究の傾向を明らかにし、彼がプロジェクト・メソッドをどのように理解し、評価していたのかを考察する。先述の課題意識から、とりわけ、実践への導入に対する彼の示唆や教授理論の理解がどのようなものであったのかを検討したい。

* 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1）

1. プロジェクト・メソッドの研究にいたるまで

上記の課題に入る前に、プロジェクト・メソッドの研究に取り組むまでの入沢の教育・研究歴について概観しておこう⁽⁷⁾。入沢は1885(明治18)年12月23日に鳥取県日野郡宮内村の農家の次男として生まれ、2歳で親戚の養子となった。宮内簡易小学校で3年間の課程と1年間の補習科を終えると、自宅を離れて4年間の高等小学校に進学した。その後、師範学校へ進学する予定であったが、病気により断念し、養父の農業の手伝いや出身小学校の授業生を務めて過ごしていた。

養父は入沢に対して家を継ぐことを望んでいたが、入沢自身は上級学校に進学したいと考えていた。実父と実兄が入沢を支持したことでその希望は実現し、鳥取県第二中学校(米子中学校)、第一高等学校を卒業し、1908(明治41)年7月には東京帝大文科大学哲学科に進学することになった。当時の東京帝大について入沢は次のように振り返っている。

当時教育学科といふ名称はなかつたけれども、前年の四十年十月二十六日に唯今の吉田教授が助教授として教育学講座を担当せられて四十一年九月に第一回の教育学受験卒業者を出したのであつた。唯今の九大松濤泰巖君、文部省督学官龍山義亮君他三名がそれである⁽⁸⁾。

このように、入沢はプロジェクト・メソッドの研究者として同時期に活躍した松濤にやや遅れて東京帝大に入学し、吉田熊次の指導を受けることになった。卒業論文のテーマは「教育思想家としてのジョン・ロックと貝原益軒」であつたという。1911(明治44)年9月に入沢はさらに同大学大学院に進学し、在学中には、特選給費生(1912年2月から1914年8月まで)、教育学事項取調嘱託(1914年2月から同年8月まで)に採用されている⁽⁹⁾。

1914年8月に入沢は最初の勤務校である神宮皇学館に赴任した。同校には教授として着任し、修身、倫理学、心理学、論理学、宗教学、英語を担当して毎朝2時間の講義を行い、残りの時間は研究にあてることが許されていた。当時は第一次世界大戦の影響で、ドイツの文献は入手困難であつたが、職業教育や社会教育などに関するアメリカの文献を収集して読んでいたという⁽¹⁰⁾。

東京帝大助教授に就任したのは1919(大正8)年11月10日のことであつたが、この背景には教育学講

座の拡張があり、以下の引用に示すような職務が彼に課されたという。

東京に帰ることとなつたのは大正八年十一月、教育学講座が教員養成と教育研究との為⁽¹¹⁾に拡張せられて、これも恩師の推挙により転任の命を受けた。この講座拡張は文政審議会によつて決定したもので、三教授、二助教授、四助手の組織、その第四講座の助教授として任命されたのであつたが、講義の外に教育問題、教育思潮の研究を命ぜられた。師範教育制度、プロジェクト法などが当時私に課せられた問題である⁽¹¹⁾。

(下線部—引用者)

下線部に示すように、プロジェクト・メソッドの研究は着任後の入沢に与えられた研究課題であつた。入沢自身「プロジェクト法は松濤九大教授の『全我活動の教育』(大正十一年)によつて世の注意を惹いたが、私は前述の如く研究室の仕事として調査を命ぜられ⁽¹²⁾」たと述懐している。東京帝大では毎週外国教育雑誌の概要報告が行われ、アメリカ教育ジャーナリズムの動向から吉田がプロジェクト・メソッドに着目し、入沢を主任とする共同研究を開始して「構案法」という訳語をあてたという⁽¹³⁾。入沢にとってプロジェクト・メソッドの研究は、主体的に選択した課題ではなかつたが、山崎をはじめ、新教育運動を担った実践家たちとの交流を築いていく契機になった。かつて東京帝大の教育学科に在籍していた海後宗臣は、当時の入沢の研究姿勢や学風について次のように述懐している。

実際の教育問題をとりあげた『構案法による新地理教育』(大正一三年)は小学校で実践にあつていた山崎博との共著であつた。教育実際問題の研究には、学校で教育実践にあつている実際家との共同研究をするという方法をとっていたのである。後にこの方法で実際研究を発表し、第一次世界大戦後に新教育運動が盛んになったときにはその指導者の一人ともなつた。入沢助教授は教育思想と教育実践上の問題を担当し、教育の実践とも結びついた研究を進め東大教育学科の学風をつくる一人となつていた⁽¹⁴⁾。

ここにあげられている『構案法に依る新地理教育』は、山崎と共にまとめた地理科へのプロジェクト・メソッドの導入に関する著作である。ただし、同書

が刊行された時には、すでに入沢は文化教育学の研究を本格的に開始しており、山崎は田島小学校に赴任して、両者は新たに「体験教育」を唱導していくこととなった⁽¹⁵⁾。次章では、入沢が文化教育学に傾倒していくまでに、どのような情報を収集してプロジェクト・メソッドを研究していたのかを明らかにする。

2. プロジェクト・メソッドに関する論考と参考文献

プロジェクト・メソッドの調査を任された時点で留学経験のない入沢の場合、情報源のほとんどはアメリカで刊行された著作か教育雑誌記事であったと考えられる。ここでは、プロジェクト・メソッドに関する入沢の論考をとりあげ、それらをまとめる際どのような文献を収集していたのかを明らかにする。表1は、入沢がプロジェクト・メソッドに言及した記事を一覧にしたものである。

これらの記事を所収しつつ、入沢は『教育新思潮批判』（隆文館、1921年）、『新教育法原論』（教育研究会、1922年）、『新教育の哲学的基礎』（内外書房、

1923年）、『新教育方法の研究』（内外出版、1923年）、『新教育法講話』（天地書房、1924年）といった著作において、プロジェクト・メソッドに言及している。この他には、国民教育奨励会が発行した『現代文化と教育』（民友社、1924年）のなかに、「プロジェクトメソッド」と題する入沢の講演録が収められている⁽¹⁶⁾。

表1の記事の内容をもとに、入沢が参照した文献を調査したところ、以下の文献①～⑭までを確認することができた。また、上記の入沢の著作において、この14点以外に参照した文献を検討したところ、『新教授法原論』（1922）と『新教育の哲学的基礎』（1923）では文献⑮から⑳が用いられていた⁽¹⁷⁾。

- ① Stephen S. Colvin, *The Learning Process*, 1911.
- ② Alice M. Krackoweizer, *Projects in the Primary Grades*, 1919.
- ③ Mendel E. Branon, *The Project Method in Teaching*, 1919.
- ④ Charles A. McMurry, *Teaching by Project*, 1920.
- ⑤ William H. Kilpatrick, *The Project Method*, 1920.
- ⑥ Ruby Minor, “The Supervision of Project Teaching,”

表1 プロジェクト・メソッドに言及した記事

論 題	掲載誌	巻	号	年	月	日
教育改造の諸方面	農業教育		229	1920	7	10
新教授法の要素としての『問題』	都市教育		195	1920	12	1
米国田園学校に於ける農業教育の新方法と其の宣伝	農業教育		235	1921	1	1
「構案教授」の諸概念	創造	3	6	1921	6	1
構案教授の概念の発達	帝国教育		467	1921	6	1
マクマリーの『構案に依る教授』（一）	教育時論		1302	1921	6	15
マクマリーの『構案に依る教授』（二）	教育時論		1303	1921	6	25
マクマリーの『構案に依る教授』（三）	教育時論		1304	1921	7	5
自由教育思想の発達	小学校（臨時）			1921	7	25
ストックトンの構案作業論	帝国教育		469	1921	8	1
構案教授法の意義及び価値	教育学術界	43	5	1921	8	1
「構案教授」と「作業学校」	教育論叢	6	6	1921	12	1
「構案教授」と「作業学校」	愛知教育		409	1922	1	1
構案教授の起源及び発達	教育論叢	7	3	1922	3	1
農業教育と構案教授	農業教育		249	1922	3	10
新教育の中心概念	教育時論		1337	1922	6	5
パーカー教授の構案教授論	創造	4	10	1922	10	1
「国民教育」の新方法	教育論叢	9	5	1923	5	1
新教育の方法について	教育研究		263	1923	10	15
プロジェクトメソッドに就て	教育学術界	48	2	1923	11	1
プロジェクトメソッドに就て	教育論叢	10	6	1923	12	1

- Educational Administration & Supervision*, vol.5, no.8, 1919.
- ⑦ Irving E. Miller, *Education for the Needs of Life*, 1917.
- ⑧ James L. Stockton, *Project Work in Education*, 1920.
- ⑨ Stuart A. Courtis, "Teaching Though the Use of Purposeful Act," *Teachers College Record*, Vol.21, No.2, 1920, p. 139-149.
- ⑩ John A. Stevenson, *The Project Method of Teaching*, 1921.
- ⑪ Rufus W. Stimson, *Vocational Agricultural Education by Home Project*, 1919.
- ⑫ George R. Twiss, *Science Teaching*, 1917.
- ⑬ John F. Woodhull, *Teaching of Science*, 1918.
- ⑭ Samuel C. Parker, *Project Teaching, Pupils Planning Practical Activity*, 1922.
- ⑮ Mendel E. Branom, Fred K. Branom, *The Teaching of Geography*, 1921.
- ⑯ Fred K. Branom, "The Project in Geography," *Education*, vol.42, no.5, 1922, pp.261-274.
- ⑰ Franklin Bobbitt, *The Curriculum*, 1918.
- ⑱ Margaret G. Wells, *A Project Curriculum*, 1921.

入沢は、少なくとも、1910年代から1920年代初頭までにアメリカで刊行された以上の文献を収集していると考えられる。刊行年の早いコルヴィン (Stephen S. Colvin) の①は「問題 (problem)」について論じているものの、プロジェクトについては取りあげていない。入沢の「新教授法の要素としての『問題』」(1920年)では、同書とクラコワイザー (Alice M. Krackoweizer) の②の著作をとりあげ、問題法とプロジェクト・メソッドを関連的に論じている。プロジェクト・メソッドを主題にした最初の記事「構案教授」の諸概念では、「構案教授に関して従来公にされた成書としては、クラツコウイチェルの『低学年における構案』(一九一九年)、ブラノムの『教育に於ける構案法』(一九一九年)、マクマリーの『構案による教授』(一九二〇年)があり、キルパトリックの「構案教授」も小冊子として出版されて居る」と②③④⑤をあげており、プロジェクト・メソッドに関する専門書として、入沢はまずこの4冊を参考にしたと考えられる⁽¹⁸⁾。

⑫のトワイス (George R. Twiss) や⑬のウッドハル (John F. Woodhull)、⑰のボビット (Franklin Bobbitt) の著作などは、表題からはプロジェクト・メソッドとの関連性がわかりにくい、これらはM・ブラノムの③やスティーヴンソン (John A. Stevenson) の⑩にお

いて紹介されており、そこから遡っていったのではないだろうか。

18点の文献のうち、教育雑誌記事は、⑥、⑨、⑯の3点のみであるが、東京帝大では雑誌の調査と概要報告が共同で行われていたため、入沢が実際目にした記事はこれよりも確実に多いはずである⁽¹⁹⁾。⑥のマイナー (Ruby Minor) の記事は、1919年10月に発行されており、東京帝大に着任した直後から、入沢はプロジェクト・メソッドの調査を開始していたと考えられる⁽²⁰⁾。表1をみるとわかるように、彼がプロジェクト・メソッドについて最も活発に論考を発表したのは1921年頃であり、1922年の「新教育の中心概念」や、1923年の「国民教育の新方法」、「新教育の方法について」などでは、ごく部分的な言及にとどまっている。1923年頃の入沢は、すでに文化教育学の研究に本格的に着手していたのであった。

1921年に発表した「構案教授の意義及び価値」では、⑩までの文献を用いてプロジェクト・メソッドに対する総合的な評価を行っている。⑩までの文献の中で別冊でも個別に紹介を行ったのは、C・マクマリー (Charles A. McMurry) の④とストックトン (James L. Stockton) の⑧の著作のみであり、とくに前者については詳しく紹介していた。1922年以降は、「農業教育と構案教授」において、農業教育に関するスティムソン (Rufus W. Stimson) の⑪、科学教育に関するトワイスの⑫、ウッドハルの⑬の著作を、「パーカー教授の構案教授論」において、シカゴ大学のS・パーカーによる⑭を新たに紹介した。パーカーの⑭はシカゴ大学発行の *The Elementary School Journal* に掲載された記事を別冊にしたものであるが、これは留学中の篠原助市から入沢あてに送られてきたものとされている⁽²¹⁾。

次章では、これらの参考文献を用いつつ、入沢がプロジェクト・メソッドをどのように受容したのかを考察する。

3. 受容の特質

3. 1 プロジェクト・メソッドの史的展開と概念の整理

入沢によるプロジェクト・メソッドの研究は、特定の情報に着目して開始されたわけではなく、プロジェクト・メソッドのルーツや展開に即して多様な概念や実践的系譜を整理していくというものであった。

こうした整理において彼がまず彼が用いたのが、M・ブラノムの著作 *The Project Method in Education* (文献③) の第2章「教育概念としてのプロジェクトの発

達 (The Evolution of the Project as an Educational Concept)」であった。原典ではアメリカにおけるプロジェクト概念の展開を、スネッデン (David Snedden) の記事からキルパトリックの論文「プロジェクト・メソッド」などを含む約10点の論考を順番に紹介する形で論じている。入沢の記事「構案教授の概念の発達」は、同書を用いて、スネッデンの概念規定からキルパトリックの概念が成立するまでの展開を「具体的作業の力説から全我活動力説の一般的方法の概念にまで発達した状況」への変化としてとらえている。プロジェクトを先駆的に提唱したスネッデンは「此の語を積極的、具体的教育作業の単位をあらはすものとした」と述べ、これに対してキルパトリックは「具体的な、客観的な仕事とか、複合的問題に力説点をおかないで、全我的、全目的の活動を含む仕事の単位を力説」したと紹介しており⁽²²⁾、こうした説明はほぼ原文の翻訳である。入沢のいう「具体的作業」とは、「農業の家庭に於ける実習」や「工業実習」などを指しており、プロジェクトは「農業」や「工業」などにおける実践的な学習活動から発達してきたと入沢はとらえていた⁽²³⁾。

入沢はアメリカにおけるプロジェクト・メソッドの論者を、「スネッデン一派の具体的方面を力説するもの」と、「キルパトリック一派の精神的活動の方面を力説」するものと整理していたが⁽²⁴⁾、この二項対立的な区分は、上記のようなブラノムの著作の整理やスネッデンとキルパトリックを冒頭で対照的に提示したマイナーの記事 (文献⑥) を参照して着想したと考えられる。

入沢が個別の情報を数点紹介したことは前章で指摘したが、キルパトリックの論文はそうした形では取り上げられなかった。その理由は、国内で松濤がすでに同論文を紹介していたことに加え⁽²⁵⁾、スネッデンが関与した農業教育のホーム・プロジェクトなどのほうが本来の意義を有すると判断していたためである。入沢は、「目的の意識」を強調する「キルパトリック等の見地は広漠に失し、最初のこの方法の力説点からデヴィエートしたもの⁽²⁶⁾」、また「キルパトリック式に行かば応用は広からんも単に自動教育の力説に終つて此の法の特色を失つて了ふ⁽²⁷⁾」と彼の理論を評価していた。すなわち、論文「プロジェクト・メソッド」は、理念の強調にとどまり、具体性に乏しいと批判していたのであるが、一方で入沢は、ホレースマン校の報告書を検討しておらず、キルパトリックによる実践的研究への取り組みに着目していなかった⁽²⁸⁾。また、キルパトリックの論文そのものよりも、M・ブラノム

の著作の記述などがその特質理解に用いられており、入沢のキルパトリック批判には情報収集や選択に問題が含まれていたといえよう。

このように、当初入沢は、M・ブラノムの著作を用いて20世紀以降のアメリカにおけるプロジェクト概念の展開を整理していたのであるが、ストックトンの著作 *Project Work in Education* (文献⑧) を用いるようになってからは、18世紀のルソーをルーツとする近代教育思想の上にプロジェクト・メソッドを位置づけるようになった。表1の入沢の記事「自由教育思想の発達」「構案教授の起源及び発達」「プロジェクトメソッドに就て」などは、こうした歴史的な視点に基づく記述となっている。ストックトンの著作の前半部では、ルソーからペスタロッチ、フレーベル、ヘルバルト等に至るヨーロッパ近代教育思想や教授理論が、デューイに代表されるアメリカの教育学発展の基礎となったことを詳述している。注目すべきことは、同書を通じて、入沢がプロジェクト・メソッドの基礎にヘルバルトやヘルバルト派の教授理論を位置づけるようになったことである。この点については、入沢がどのように理解していたのかを本章の最後に検討したい。

3. 2 プロジェクト・メソッドに対する評価

記述の通り、1921年に発表した「構案教授の意義及び価値」において、プロジェクト・メソッドに対する総合的な評価を行っており、①「具体、直観、行動」、②「実生活」、③「統一・結合」、④「目的の自覚、問題の意義」、⑤「自己活動、自己動機」の5点をアメリカの論者が主張する共通の「力説点」としてあげていた。プロジェクト・メソッドは、従来の教授法改革で唱えられてきた要点を包括的に含み、それを新しいかたちで組織して具体化していることを入沢は高く評価していた。しかし、一方でこの記事では、プロジェクト・メソッドの問題点として3点の批判を行っていた。

まず1点目は、「自発、自動の力説から、受容、伝達、記憶の方面を閑却すること」とされており、これはプロジェクト・メソッド論者の「力説点」として④にあげた「自己活動」の原理が一方で孕む問題でもあると述べられている。プロジェクト・メソッドの研究の過程で、入沢はしばしばドイツの作業教育にも言及しており、上記の欠点に対して、ケルシェンシュタイナーは「自動、作業を力説しつつも、受容的作業も取り入れて居る」と評価していた⁽²⁹⁾。入沢はのちに、「自己活動」に代わる概念として「価値活動」としての「体験」を唱導するようになるが⁽³⁰⁾、文化の「受

容」と「創造」をあわせて説く文化教育学と「自己活動」から「価値活動」への転換を提唱する体験教育へと入沢が研究関心を移行させていった背景には、プロジェクト・メソッドに対する彼の批判も関連していたと考えられる。

2点目には、「この法の基礎たるデュキーの思考の見方」をあげ、それが「試作的にすぎ、実験にすぎ具体的思考に過ぎて」おり、「具体的思考から直に抽象的思考の陶冶となると考へるところに偏頗がある」と指摘していた。これは、デューイの思想を背景とするアメリカの教育論全体の問題であるとして、スネッデンであれ、キルパトリックであれ、すべての論者にこうした欠点があるという⁽³¹⁾。

3点目には、「功利、実生活、現在の必要に過ぎ陶冶と修練とを忘れる」と指摘し、この点もプロジェクト・メソッド論者の主張に付随しがちな問題としてとらえていた⁽³²⁾。ここで入沢が述べている「修練」とは、原文では“drill”を指している。以上のように、入沢はプロジェクト・メソッドの特質を好意的に評価するばかりではなく、欠点も含んだものとして批判も行っていた。

さらに、入沢はプロジェクト・メソッドを紹介した当初から、これを「凡ての学科に行ふためには時間の不経済となる⁽³³⁾」と述べており、実践への全面的な導入には批判的であった。彼が収集した文献の中でも、ミラーの著作*Education for the Needs of Life* (文献⑥) やカーチスの記事“Teaching Though the Use of Purposeful Act” (文献⑧) では、プロジェクト・メソッドの限界や問題点もとりあげられていた。これらの文献に依拠して彼はプロジェクト・メソッドを補助的に活用することを推奨していたのである⁽³⁴⁾。また、そうした情報を、「キルパトリックが全部に応用しやうとする論と比較すべし」とも述べており、導入に関する彼の見解からもキルパトリックの理論には批判的であった⁽³⁵⁾。プロジェクト・メソッド自体に意義があるとしても、「児童及び教師が不適當であるのにそれをやらうとする」ならば、そこに「弊害」が生じるため、「吾々の力量に応じてその方法を行うべき」と指摘していた⁽³⁶⁾。

実践への導入に関する入沢の見解は慎重なものであり、キルパトリックが主導したホレースマン校の研究をモデルに組織的な実践的研究を開始した東京女高師附小の藤井や北沢と比べると温度差があったといえよう⁽³⁷⁾。次節では、プロジェクト・メソッドの研究において入沢がその教授理論をどのように理解していたのかを検討したい。

3. 3 教授理論に対する理解

ストックトンの*Project Work in Education* (文献⑧) を通じて、入沢はヘルバルトやヘルバルト派の教授理論がプロジェクト・メソッドの基礎にあると理解していた。また、入沢は、同書が「プロゼクトメソッドの起因と申しませうか、最近の元を開いたものとして、デュキーとマクマリーを挙げて居る」と紹介し、「是等はヘルバルトの考へ方から」発達したと指摘していた。次の引用は、これに続けて入沢がヘルバルトを再評価した箇所である。

ヘルバルトと云ふ人は非常に悪いことをしたやうに悪く云はれますけれども、ヘルバルトも自己活動が大切と云ふことを説いて居りますし、ヘルバルトの段階にしましても帰納的に立てたものであるからプロゼクトメソッドの精神に合する、実際的の方から這入つて原理を得やうとするものであるから、さう云ふ点から言へば、自己活動に訴へて帰納的に或は直観的に教授を取り扱つて行かうと云ふのであります⁽³⁸⁾

このように、入沢はプロジェクト・メソッドの直接的なルーツをデューイやF・マクマリーの理論とみた上で、その特質である「自己活動」の原理や「帰納的」、「直観的」な教授段階論がヘルバルトの学説から発展してきたと理解していた。こうした理解は、キルパトリックが唱導する「目的ある活動」の段階にも該当し、「ヘルバルトの段階に目的の指示」が本来あることを指摘しつつ、「唯指し示すだけでなくして目的を意識させて、それに依つて全力を注ぐ」という学習者の観点で教授段階を解釈していることを指摘していた⁽³⁹⁾。

さらに、教授段階をこのように理解するとともに、入沢はプロジェクトをヘルバルト派の「方法的單元」にかわる新しい單元とみて次のようにとらえていた。

従来吾々は、ヘルバルト派の教授法に於て方法的單元と云ふ語を使つて居る。一時間若くは二時間或は数時間に亘つても宜いが、教材の一の纏まつたものを方法的單元として取扱つて居るが、其の方法的單元では児童の興味を誘ふ力も其の他の力も少ないから、大直観單元が必要である。即ち社会上に於ける出来事、具体的の仕事、さう云ふものは直観的單元である。大直観單元と云ふ大の字を附したのは、例へば肥料をやると云ふやうなことは、一の直観的の実習である、小直観單元であ

る。肥料をやつたりいろいろ手数を掛けて収穫を得るまでの一纏まつた仕事をやらなければならぬ、それで大直観単位と言ふのである。⁽⁴⁰⁾

(下線部—引用者)

ここで「大直観単位」と入沢が述べているのは、C・マクマリーの著作 *Teaching by Projects* (文献④) において、プロジェクトが「大学習単位 (Large Units of Study)」や、「大直観教授 (The Enlarged Object Lesson)」と説明されているためであろう。入沢は「マクマリーの『構案に依る教授』」と題する三度の連載で同書の概要を紹介したが、なかでも第3章の「大学習単位としてのプロジェクトの意義 (The Significance of Projects as Large Units of Study)」を詳しくとりあげていた⁽⁴¹⁾。

周知の通り、C・マクマリーは19世紀末から活躍してきたアメリカヘルバルト派の代表的人物である。彼は断片的な知識の寄せ集めを批判して、学習の核となる知識を精選し、これを「タイプ (典型)」と呼んでカリキュラム編成の中心に位置づけてきた。1920年代にかけて、さらに単元数の削減と個々の単元の拡充に取り組んでいき、「タイプ」よりも「プロジェクト」という用語を用いるようになったと言われている⁽⁴²⁾。先の引用において、入沢が「肥料をやると云ふやうな」単なる「直観的の実習」と、「大直観単位」を区別しているのは、プロジェクトのこうした性格をとらえているためである。

Teaching by Projects では、ソルト河の灌漑事業などのように、実社会で行われたプロジェクトを例示しており、入沢も「実生活を教授に入る、ことは構案教授の主要概念」であるとして、「マクマリーは最もこれを力説して居る」と述べていた⁽⁴³⁾。このような観点から、入沢はプロジェクトによる単元を「生活単元」とも呼び、教科に分化しない「実生活」の移入を説いたのであった⁽⁴⁴⁾。

ただし、C・マクマリーによるプロジェクトは、単に個別の単元を大規模にするというものではなかった。プロジェクトの大単元化は、同時に教材間の相互連関の徹底によってカリキュラム全体をより統合的に再編成することを目指していた。この点について入沢は、「チャー一流の統合とは精神が違ふ、デユキー一流の統合である⁽⁴⁵⁾」などと述べるにとどまっておらず、プロジェクトにおける「統合」がどのような内容を意味するのかは十分に説明されていない。

おわりに

入沢は1920年代初頭までにアメリカで刊行されていたプロジェクト・メソッドに関する著書や雑誌記事を多数収集しており、その史的展開や概念の整理に取り組んでいた。

入沢は、奈良女高師の松濤や東京女高師の藤井や北沢のように、プロジェクト・メソッドの代表的研究者であるキルパトリックの理論研究や実験的研究に着目しておらず、むしろ収集した情報全体の中でも彼の論文「プロジェクト・メソッド」に批判的であった。そのような評価は、彼がキルパトリック理論の性格を理解できなかったために生じたと考えられる。キルパトリックの理論はすぐに実践に導入できるようなものではなく、入沢が指摘していたように「一般教授法」の理論であったといえる。したがって、キルパトリック自身は、ホレスマン校でその理論を具現化するための実践的な研究にも取り組んでいたのだが、その報告書の内容を入沢は検討していなかった。

しかし、入沢は、C・マクマリーの *Teaching by Projects* を評価し、ヘルバルトやヘルバルト派を再評価して、かつての「方法的単元」を学習者の視点から再組織することの重要性を認識していた。プロジェクト・メソッドはアメリカではカリキュラム史で検討されており⁽⁴⁶⁾、筆者はわが国の受容についても同様の視点からその意義を再検討する必要があると考えている。こうした点から本事例を検討した場合、入沢が「生活単元」に目を向けたことは注目すべき点である。

プロジェクト・メソッドをカリキュラムの理論として受容するためには、入沢がプロジェクト・メソッドの基礎としたヘルバルト派の「相関」の原理や文化史段階説を基礎としたシークエンスの原理の理解がさらに重要な鍵になると考えられるが、この点については、同時期に活躍した松濤や藤井、北沢なども事例としてさらに検討を行いたい。

また、すでに指摘したように、入沢はわが国の教育界に対してプロジェクト・メソッドの補助的な活用を勧めており、彼の指導を受けた山崎も全面的導入を意図した研究には取り組まなかったと考えられる。今後はさらに、入沢の研究が、山崎によりどのように理解、ないし活用されたのかを検討し、その役割や限界について考察することとしたい。

註

(1) 19世紀末にはウッドワードによる手工教育の実践にプロ

ジェクトが導入されていた。この点については、田中喜美『技術教育の形成と展開—米国技術教育実践史—』（多賀出版、1993年、71-120頁）、杉浦英樹「C. M. ウッドワードの「プロジェクト法—セントルイス手工学校における理論と実践—」」（『教育方法学研究』第20巻、1994年、11-19頁）を参照されたい。また、キルパトリック以前のプロジェクトの展開については、佐藤隆之『キルパトリック教育思想の研究—アメリカにおけるプロジェクト・メソッド論の形成と展開—』（風間書房、2004年、57-61頁）において整理されている。

- (2) 拙稿「森川正雄によるプロジェクト・メソッドの受容—『幼稚園の理論及実際』の原典解明を中心に—」（『幼児教育史研究』第3号、2008年、1-15頁）、「東京女子高等師範学校附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの研究実態—第三部幼学年カリキュラムの開発を中心に—」（『カリキュラム研究』第19号、2010年、1-13頁）、「近代日本における進歩主義幼小連携カリキュラムの受容—三校の女子師範学校の研究態勢を中心に—」（『東京学芸大学紀要（総合教育科学系 I）』第62集、2011年、7-17頁）を参照されたい。
- (3) 入沢によるプロジェクト・メソッドの受容に関しては、キルパトリックに関する戦前のわが国の先行研究整理として、佐藤前掲書（21-22頁）がとりあげており、入沢がキルパトリックに批判的で、C・マクマリーを評価していたことを指摘している。
- (4) 山崎博「入沢先生の追想」（『教育学研究』第14巻第1号、1946年、53頁）。
- (5) 体験教育の実践の概要を紹介・検討した先行研究には、「山崎博と体験教育」（小原国芳『日本新教育百年史』第4巻、玉川大学出版部、1970年、462-470頁）、谷口雅子「大正時代の体験学校」（『福岡教育大学紀要』第33号第2分冊、1983年、73-90頁）や、影山清四郎「戦前の田島小学校における体験教育について」（『横浜国立大学人文紀要』第1類、哲学・社会科学、第31輯、1985年、23-40頁）などがある。
- (6) たとえば、東京女高師および奈良女高師附属小学校の実践に関しては、吉村敏行「奈良女子高等師範学校附属小学校における「合科学習」の実践」（『東京大学教育学部紀要』第32巻、1992年、275-283頁）、「東京女子高等師範学校附属小学校における「作業教育」」（『宮城教育大学紀要』第31巻、第2分冊、1996年、177-185頁）、奈良女高師附属幼稚園の実践に関しては橋川喜美代『保育形態論の変遷』春風社、2003年、344-354頁）などの研究がある。なお、拙稿「神奈川県女子師範学校附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの導入—山崎博による運動会の実践を中心に—」（『筑波大学大学院博士課程

教育学研究科教育学研究集録』第27集、2003年、37-47頁）も、山崎による実践に焦点をあてたものであり、入沢による情報受容の実態や研究の特質については明らかにしていない。本稿の考察をふまえて、山崎への影響を再検討したい。

- (7) 入沢は自身の生い立ちや研究歴などについて「私と私の教育学の生ひ立ち」（『教育』第2巻第1号、1934年、81-94頁）で論じている。また、入沢の経歴については、樽松かほる「入沢宗寿の研究（1）—資料・「略年譜」および「著作目録」—」（『桜美林論集』第24号、1997年、21頁）掲載の略年譜を参照した。
- (8) 入沢、同上、85頁。松壽は、1926年に奈良女高師から九州帝国大学に赴任した。
- (9) 前掲、樽松論文、21頁。
- (10) 前掲、入沢「私と私の教育学の生ひ立ち」88頁。当時入手していた文献に関して、「故沢柳政太郎氏も刺激と資料とのためにタイムス教育附録を次々と送つて下さった」こと、「大戦中でドイツの書物は来なかつたがアメリカの書物」が届き、「職業教育」、「社会教育」に関するものを読んだと振り返っている。
- (11) 前掲、入沢「私と私の教育学の生ひ立ち」89頁。前掲、樽松論文（21頁）によれば、入沢は、教育学講座での職務以外にも、1919年11月28日から1922年4月までの間は、同大学の農学部附属農業教員養成所で教育学の講義を担当していた。
- (12) 入沢、同上論文。
- (13) 拙稿「日本におけるプロジェクト・メソッドの普及—1920年代の教育雑誌記事の分析を中心に—」（『東京学芸大学紀要（総合教育科学系）』第60集、2009年、53-65頁）。
- (14) 海後宗臣『教育学五十年』評論社、1971年、37頁。
- (15) 入沢は、『国民教育の新潮』、『新教育方法の研究』、『新教育の哲学的基礎』などをまとめた1923年頃から「私はデイルタイ派の文化教育学を注意した」と自身の研究をふり返り、「この年から出来た田島の体験学校はデイルタイ派の思想を根拠とし、文化教育、体験教育を標榜し施設したものである」と述べている（前掲、入沢「私と私の教育学の生ひ立ち」90-91頁）。なお、入沢は1929年3月26日に留学に出発し、1930年6月28日に帰国した（前掲、樽松論文、21頁）。この間山崎のもとに度々手紙を送っていたほか、ヘルシンキで開催された第五回世界新教育会議に参加した折には、田島小学校の研究成果をもとに報告を行ったという（前掲、山崎「入沢先生の追想」）。帰国後は、新教育協会の副会長に就任し、ここでも常任理事の山崎と行動をとらした。1932年には、東京帝大の教授となり、1945年5月に死去した。
- (16) 入沢「プロジェクトメソッド」国民教育奨励会編『現代

- 文化と教育』民友社、1924年、318頁-354頁。
- (17) 入沢『新教育の哲学的基礎』（内外書房、1923年、参考書2-3頁）では、第3章「構案教授法とダルトン案」の参考文献15点が示されており、このうち、プロジェクト・メソッドに関するものは13点で、ポビットの⑯、ウェルズの⑳が新たに用いられている。
- (18) 入沢「『構案教授』の諸概念」『創造』第3巻第6号、1921年、29-30頁。
- (19) 前掲、拙稿「日本におけるプロジェクト・メソッドの普及」では、東京帝大におけるプロジェクト・メソッド研究の経緯を明らかにし、彼らが発表した記事が*School and Society*, *The Elementary School Journal*, *Teachers College Record*などの雑誌記事を参照していたことを指摘した。
- (20) 前掲、入沢「『構案教授』の諸概念」では、「カンサス州立師範」の「マイナー」という人物の記事を用いてプロジェクト・メソッドの概念について論じており、その内容は1919年10月に発行された *Educational Administration & Supervision* 誌掲載の、Ruby Minor, “The Supervision of Project Teaching” と一致する。著者の所属も、“Emporia, Kansas, State Normal School” と記されており、入沢は同誌に掲載されたこの記事を参照したと考えられる。
- (21) 入沢「パーカー教授の構案教授論」（『創造』第4巻第10号、1922年、15頁）では「同教授（S・パーカー—引用者）及び篠原君（滞米中の）からその論を述べた小冊子を送つて来た」と記されている。
- (22) 入沢「構案教授の概念の発達」『帝国教育』第467号、1921年、29-34頁、Mendel E. Brantom, *The Project Method in Education*, pp.30, 44.
- (23) 入沢「構案教授法の意義及び価値」『教育学术界』第43巻第5号、1921年、618-619頁、同「プロゼクトメソッドに就て」『教育学术界』第48巻第2号、1923年、104-120頁など。
- (24) 入沢「マクマリーの構案による教授（一）」『教育時論』第1302号、1921年、8頁。
- (25) 前掲、拙稿「日本におけるプロジェクト・メソッドの普及」55頁。
- (26) 前掲、入沢「構案教授の概念の発達」34頁。
- (27) 入沢「マクマリーの『構案による教授』（三）」『教育時論』第1304号、1921年、8頁。
- (28) この報告書の概要については、拙稿「米国におけるプロジェクト・カリキュラムの史的展開—ホレス・マン・スクールにおける幼小連携カリキュラムの開発—」（『アメリカ教育学会紀要』第20号、2009年、18-30頁）でとりあげた。
- (29) 前掲、入沢「構案教授法の意義及び価値」621頁。入沢「『構案教授』と『作業学校』（『教育論叢』第6巻第6号、1921年12-19頁）は、プロジェクト・メソッドと作業教育の共通点に焦点をあてており、ブルガー（Eduard Burger）による「作業の過程」として、「作業の目的の意識」、「その目的を実現する手段の工夫」、「目的の成就」という3段階をとりあげ、プロジェクト・メソッドの教授段階との類似性を指摘している。
- (30) 入沢「現代教育教授思潮講話」『教育学术界』第55巻第3号、1927年、93-103頁。
- (31) 前掲、入沢「構案教授法の意義及び価値」621頁。2点目の批判については、入沢「新教授法の要素としての問題」（『都市教育』第195号、1920年、11頁）において、ドイツの実験教育学者「モイマン」が「思考の本質的な点は表示内容の関係を見出さうとする点にあるといつて居る」と指摘し、「この関係づける活動としての思考の方面を閑却するのは、機能的論者新教授法論者の欠点である」と述べていた。
- (32) 前掲、入沢「構案教授の意義及び価値」621頁。
- (33) 前掲、入沢「教育改造の諸方面」『農業教育』第229号、1920年、5頁。
- (34) 前掲、入沢「構案教授の意義及び価値」621頁。
- (35) 入沢『新教授法原論』教育研究会、1922年、256頁。
- (36) 前掲、入沢「プロジェクトメソッド」353頁。
- (37) この点は、前掲、拙稿「東京女子高等師範学校附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの研究実態」を参照されたい。
- (38) 前掲、入沢「プロゼクトメソッドに就て」107頁。
- (39) 入沢、同上論文、110頁。
- (40) 前掲、入沢「プロジェクトメソッド」332-333頁。
- (41) 入沢「マクマリーの『構案による教授』（二）」『教育時論』第1303号、1921年、6-8頁。山崎と共著の『構案法に依る新地理教育』（教育研究会、1924年）第5章「構案教育に於ける单元論」でもC・マクマリーの单元論が詳しくとりあげられている。
- (42) 庄司他人男『ヘルバルト主義教授理論の展開』風間書房、1985年、448-469頁。
- (43) 前掲、入沢「『構案教授』の諸概念」33頁。
- (44) マイナーの記事を参照して入沢は、“life unit”を「生活单元」と訳し、それが教科の枠組みを超えた教材組織をとることや、教科の統合を図ることなどに言及していた（前掲、入沢「『構案教授』の諸概念」32-33頁）。「生活」概念に関しても、キルパトリックの主張は「実生活の力説といふより、彼の力説点たる「目的ある活動」の力説」に解消してしまうと批判していた（前掲、入沢「構案教授の意義及び価値」619頁）。
- (45) 前掲、入沢「『構案教授』の諸概念」32頁。

- (46) Herbert M. Kliebard, *The Struggle for the American Curriculum, 1893-1958*, 3rd ed., Routledge, 2004, pp.130-149.

入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドの受容

—— 情報収集の実態と研究の特質 ——

Soju Irisawa's Study on the Project Method

—— Focusing on the Information Gathering and the Characteristics of Analysis ——

遠 座 知 恵*

Chie ENZA

教育学分野

Abstract

Soju Irisawa was an important scholar who introduced the project method into Japan. In this paper, I tried to identify the information which were used for his study and examined the characteristics of his analysis.

Irisawa gathered a lot of books and journals' articles about the project method which were issued in the United States in the 1910s through the early 1920s. Although there was the most famous article "The Project Method" by William H. Kilpatrick, Irisawa did not evaluate it. His study was focused on the historical development of the project method. Through this study he found the Herbart and Herbartian theories underlay the project method. He was especially interested in Charles A. McMurry's book entitled *Teaching by Projects*. C.A. McMurry was one of the representatives of American Herbartians. He thought the projects as "large units of study" and suggested to introduce the enterprise in the real world, such as the Salt River Irrigation Project. Irisawa used the term "life units" in this sense.

Although Irisawa recognized the value of the project method, he did not recommend Japanese teachers extensive use of the project method.

Key words: Project Method, Progressive Education, Soju Irisawa

Department of Pedagogy, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 入沢宗寿は、大正新教育期にプロジェクト・メソッドを日本に紹介した代表的な研究者である。本稿では、入沢がプロジェクト・メソッドの受容において実際に用いた情報を特定し、彼の研究の特質を考察した。

入沢は1910年代から1920年代初頭にアメリカで刊行されたプロジェクト・メソッドに関する多数の著作や雑誌記事を収集していた。その中にはキルパトリックの著名な論文「プロジェクト・メソッド」も含まれていたが、同論文に対しては批判的な評価を行っていた。入沢の研究は主にプロジェクト・メソッドの史的展開に関する考察であった。こうした研究を通じて、彼はプロジェクト・メソッドの基礎にヘルバルトやヘルバルト派の教授理論があるととらえ、C・マクマリーの著作 *Teaching by Projects* に関心を示していた。C・マクマリーはアメリカヘルバルト派の代表的人物であり、プロジェクトを「大学習單元」として提示していた。彼はソルト河の灌漑事業のように

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

実社会で行われているプロジェクトを学校に導入することを提唱しており、入沢が用いた「生活单元」という概念はこのような実生活を導入した单元構成を意味していた。

入沢はプロジェクト・メソッドの意義を認めていたが、日本の教育界に対しては、プロジェクト・メソッドの補助的な活用を説き、全面的に導入することには批判的であった。

キーワード: プロジェクト・メソッド, 大正新教育, 入沢宗寿